

しかし血気旺盛ながら精神未熟な学生にこの言葉“Be gentleman.” 「常に紳士たれ」を植え付けるにはもう一つの道具が必要でした。それは基督教と聖書の授業への導入でした。

官費学校（学生は給料支給、卒業後は中級官吏として就職保証付きなのです）に西洋の基督教しかも主流とはいえない清教徒教育を、学長の独断で導入することがどうして許されたのでしょうか。また学生達がそう易々と異教を受け入れられたのは全く不思議ではありません。その理由とは？

その理由は次の二つの疑問点と関連して推察すべきでしょう。

二つの疑問点すなわち、

① なぜ多くの学生たちが従順に基督教に感化され成長し、しかも多方面で大成できたか。

② 誰がこの偉大なる人物を連れてきたのか。を合わせて解明していきたいと思います。それには地理的、時代的背景に注目しなければなりません。

地理的時代的背景：幕末期からすでに欧米列強からの開国を迫られていたのですが、最大の脅威はロシアでありました。南は対馬海峡、北は千島どころか津軽海峡さえも欧州最強のバルチック艦隊の遊弋に脅かされ、領土侵略の脅威はすでに清国、朝鮮の悲劇が現実化していました。また地下資源の開発、特に石炭は当時の重要な船舶、産業燃料であり、北海道の資源開拓は明治新政府にとって大規模農業技術の獲得とともに最重要点でありました。しかしそれと同時に国土防衛上この激寒地に対露要衝として都市を造り住民を定着させることがより大きな狙いでした。

この全てを習熟させ得る学校として札幌仮農学校がまず東京に設立され、有能かつ質実剛健な学生を厚遇で募集したのです。札幌への移動支度金は制服と金拾圓だったとのことで、今で言えば多分 20 万円以上にもなるでしょう。このとき初代開拓庁長官に任命されたのが薩摩閥の剛胆なる軍人黒田清隆でした。彼の就任が北海道開拓を成功させた全ての源であると小生は強く想っています。

黒田は米国を視察し、荒涼たるこの北地を開拓するには、西部開拓を成功しつつあった新興国の米国を模範とすべきことを確信し、教員の人選を対米吉田公使に依頼しました。

吉田は人選に悩み、これを Clark 学長に求めました。人選は難航し困った金子は Clark 学長に面接し、冗談のつもりで、それでは学長自ら来られては、と言ったところ、「ヨシ、行こう」と即断されたのだそうです。

Clark 先生はドイツにも留学し、学位を得られているので、当時ドイツ留学閥が強かった政府、閣僚達をも同意させやすかったに違いありません。（その6に つづく）